

2017年度
関西学院大学ロースクール
B日程

一般入試（法学未修者）
特別入試（法学未修者）

論 文 問 題

《10:00～12:00》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論文問題】

次の問題文をよく読んで、以下の各設問に答えなさい。

[設問1] 筆者によれば、なぜ「教養主義」は決定的に崩壊したのか。その理由について説明しなさい。その際、必須のキー・フレーズを2つ選び、答案のその箇所に下線を引くこと（160字以内）。

[設問2] 筆者のいう「教養主義」と「キョウヨウ主義」の違いについて、両者を対比して説明しなさい（200字以内）。

[設問3] 現代の日本社会は、生産労働人口の急激な減少によって、地域社会の労働力不足、特に福祉や医療など人と対面してサービスを提供する業務での労働力不足が深刻化している。そこで、労働生産性を向上させてその賃金を高め、若者を引き付けていくことが重要な政策的課題であるから、一部エリート校を除く大部分の大学、特に人文系学部では、教養教育よりも実学・職業教育に重点を移すべきである、たとえば「英文学・文学」では、シェークスピアや文学概論を教えるより、その地域の観光業で必要となる英語等を中心に教えるべきだ、とする議論がある。筆者の考えに立って、このような議論を批評したうえで、あなたの考えを述べなさい（600字程度）。

問題文

教養主義の終焉は、これまでみたような支持的社会構造や支援文化の崩壊という消極的要因だけによるのではない。決定的な、つまり教養主義崩壊の積極的要因は、一九七〇年代後半以後の「新中間大衆社会」の構造と文化にある。

新中間大衆社会とは、経済学者村上泰亮（^{やすすけ}1931—93）によって命名されたものである。ホワイトカラーだけでなくブルーカラー、自営層、農民までを含んだ中間意識を総称したものである。しかし新中間大衆社会は、一億総「中流階級」社会の別名ではないことにとくに注意したい。新中間大衆社会は、中流階級だけではなく階級社会の消滅の現状をいいあてているのである。

社会階級はマックス・ウェーバーに準拠すれば、経済的次元と政治的次元、そして文化的（生活様式）次元での成層化をもとにした社会的カテゴリーである（『身分と階級』『権力と支配』）。三つの次元それぞれにおける序列距離が大きく、しかも高所得者は権力を持ち高学歴であり、中位所得者は、権力もほどほど学歴も中流というように、相互の次元での地位の一貫性が高いときに、上流階級・中流階級・下層階級は実体的カテゴリーとなる。階級が構造化するのである。

ところが、村上は、高度成長のあとに階級が溶解しはじめたとする。階級の構造化にかかわる経済的次元と政治的次元、そして文化的（生活様式）次元それぞれでの序列が均質化するか、序列があってもその重要度が下がってきたからである。さらに、経済的に恵まれているが学歴は低いというパターンやその逆、つまり学歴は高いが経済的には恵まれていないというパターンのように三つの次元それぞれにおける^{ステイタス・インコンシステンシー}地位の一貫性が低くなることによって、階級の構造化の契機が溶解している。その結果、「伝統的な意味での中流階級の輪郭は消え去りつつあって、階層的に構造化されない膨大な大衆が歴史の舞台に登場してきたように見える」（傍点竹内、『新中間大衆の時代』）、というのである。

ホワイトカラーだけでなくブルーカラー、自営層、農民までを含んだ新中間大衆とは「階層的に構造化されない膨大な大衆」の中間意識ということになる。

とすれば、新中間大衆文化は、前章でみた一九六〇年代前後にいわれた向上心とスノビズムがまじった新中流階級的な「中間文化」（加藤秀俊）——新中間大衆文化への芽生えはみられるが——とは異なっている。上や下についての距離の意識が脆弱^{ぜいじやく}なのだから、「中間意識」といういいかたそのものが実態を正確に伝えていないようにわたしには思える。上と下への距離の意識を限りなく希薄化させた中間意識である。

新中間大衆文化は、隣人と同じ振る舞いを目指し、すべて高貴なものを引きずりおろそうとするフリードリッヒ・ニーチェのいう「畜群」^{ヘーデルデ}（衆愚）道徳に近いものではなからうか。

ニーチェはいう。「中間のものと中位のものとを、最高であってこのうえなく価値あるものと評価するが、これは、多数者が住みついている場所であり、多数者がこの場所に住みつくやり方である。(中略) 中間のものうちでは恐怖というものがなくなる。ここにいるのはおのれの仲間だけだからである。ここには誤解される余地もほとんどなく、ここには平等があり、ここでは、おのれ自身の存在が非難されるべきものとしてではなく、正当な存在として感ぜられ、ここには満足感が支配している。不信は例外者に関することであり、例外者であることは罪責とみなされる」(『権力への意志』)。

あるいは、ホセ・オルテガ・イ・ガセットがいった凡俗に居直る——「凡俗な人間が、自分が凡俗であることを知りながら、敢然と凡俗であることの権利を主張し、それをあらゆる所で押し通そうとする」(『大衆の反逆』)——大衆平均人の文化といったほうが実態に即している。「サラリーマン」型人間像つまり大衆平均人間にむけて強力な^{やすり}鑿をかける文化である。こうした意味での「サラリーマン」文化の蔓延と覇権こそ教養主義の終わりをもたらした最大の社会構造と文化である。

かくて、フランスの社会学者ブルデューのいう正統文化(教養)による象徴的暴力など、いまの大学キャンパスではとても考えられにくい。機能的にはいまやサラリーマン文化、あるいはエンターテインメント文化である大衆平均人文化こそ正統文化の位置にある。高級文化からの逸脱である「野卑」「無教養」からよりも、大衆平均人文化からの逸脱である「変人」「おたく」ラベルから生じる象徴的暴力と困惑のほうが大きいからだ。

わたしが教養主義の死を身近でつくづく感じさせられたのは、大学の授業で旧制高校の生活について触れ、教養主義についていくらかの説明をしたときのことである。ある学生が質問をした。「昔の学生はなぜそんなに難しい本を読まなければならないと思ったのか？ それに、読書で人格形成するという考え方がわかりづらい」、という率直な、いや率直すぎるともいえる質問に出会ったときである。

わたしのほうは、旧制高校的教養主義をもういちどそのまま甦らすべきだなどという気持ちはないにしても、読書による人間形成というそんな時代があったこと、いまでも学生生活の一部がそうであっても当たり前だ、と思っている古い世代である。「読書で人格形成するという考え方がわかりづらい」というのは、そんなわたしのような世代にはやはり意表を突く質問としかいいようがなかった。しかし、それだけにあらためて教養主義の終焉を実感することになった。

そうはいてもいまの学生が人間形成になんの関心もないというわけではないだろう。むしろかれらは、人間形成などという言葉をあからさまに使うわけではないが、キャンパス・ライフが生きていく術を学ぶ時間や空間と思っていることは疑いえないところである。しかし、いまや学生にとっては、ビデオも漫画もサークル活動も友人とのつきあいもファッションの知識もギャグのノリさえも重要である。読書はせいぜいそうした道具立てのな

かのひとつにしかすぎないということであろう。あらためていまの学生の「教養」コンセプトを考えなければならないとおもうようになった。

そこで、一九九五年に、筒井清忠とわたしが代表になって大学生に対するアンケート調査（国立大学二校と私立大学二校、有効回答数七〇〇人）をおこなった。アンケート調査の質問項目に、「あなたの在学中の大学がどのような場所であると思うか」という問いを立て、a「将来の仕事のために、専門的な知識を獲得する場所」、b「人間形成のための幅広い教養を獲得する場所」、c「就職に有利な学歴を獲得する場所」、d「友人との交際やサークル活動など自由な時間を過ごす場所」の四項目を設定し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の四点尺度で回答してもらった。

この調査についての吉田純などの計量的分析によれば、四つの変数(abcd)間に正の相関があるが、「幅広い教養」の場所として大学を位置づける者と学生生活において「友人との交際」を重視する者との相関がもっとも高い。一般教養科目や専門科目を熱心に勉強する学生よりも友人との交際に熱心な学生が、大学を幅広い教養を獲得する場所としてイメージしている。読書パターンにおいては、思想書の読書と文学書の読書に相関が低い。思想書の読書は専門書の読書との相関が高くなっている。

こうしたことから、現代の大学生は人間形成の手段として従来の人文的教養ではなく、友人との交際を選ぶ傾向が強く、同時にかつての文学書と思想書をつうじての人文的教養概念が解体している、という知見を得ている（筒井清忠・吉田純ほか「現代大学生における『教養』の計量的研究」『京都社会学年報』第四号、一九九六年）。

とすれば、読書を中心に人間形成を考えた昔の学生は、いってみれば漢字の「教養」に生きたが、一般常識や一般経験を人間形成の道筋としているいまの学生は、ライトな教養であるがゆえに、片仮名の「キョウヨウ」に生きていることになる。

たしかに、旧制高校的な教養主義は読書中心主義で「栄華のちまた巷低くみて」（一高東寮寮歌「あ嗚呼あ玉杯に花うけて」）のように大衆と世間を外部化した特権的學生文化だった。しかし、それではいまの学生の「キョウヨウ」は、「教養」に代わる反エリート主義文化として評価されるものだろうか。

「キョウヨウ」は、高踏的ではないが、軋轢を避け、円滑な人間関係を目指したものであるから、世間並とふつうにすりよっているだけといえないだろうか。そう、ちょうど教室でいじめにあわないために、クラスの最大公約数文化に同調するように。教養主義が大衆文化との差異化主義であるとするれば、キョウヨウ主義は大衆文化への同化主義である。とすれば、キョウヨウはさきほど触れたサラリーマン文化（平均人、大衆人）への適応戦略でしかないということになる。

教養主義と人格主義の世界を生きた学生たちは、「俺は俺自身の悩みを悩み、俺自身の

運命を開拓する。此悩みと此努力とは俺を一步づゝ人生の深みに導き、人生に対する俺の態度を徐々として精鋭にするに違ひない」(『三太郎の日記』) というように悩みに悩んだきらいがある。ところがいまの学生は悩みができると、悩みをもつということだけでふつうから逸脱している証として^{とが}咎のように思ってしまう傾向があるが、過剰な現実適応学生文化と無縁ではない。

「適応」は教養のひとつの機能ではある。しかし、教養の機能は、「適応」だけではなかった。社会学者井上^{しゅん}俊は文化の作用として「適応」「超越」「自省」の三つを挙げている。教養の意味を考えるうえでこの三つの作用は重要であるから、井上の指摘によってみよう。

「適応」つまり人間の環境への適合を助け、日常生活の欲求充足をはかることは文化の基本的な働きである。実用性がこれにあたる。しかし、効率や打算、妥協などの実用性を超える働きも文化の中に含まれている。「超越」である。実用主義に対して理想主義といってもよい。しかし、文化にはさらにもうひとつの機能もある。「自省」である。みずからの妥当性や正統性を疑う作用である。自問や自省の働きである。

もともと文化の自省機能は、超越機能から派生したものであるが、しだいに超越要因から自立し、独自の意味をもつようになる。というのは「自省的要因から発せられる懐疑の矢は、一方で現実適応的要因の働きに向けられて、超越的要因からの理想主義的な現実批判とはちがった形の批判を生み出すだけでなく、他方では、超越的要因そのものの働きにも向けられうるからである」(「日本文化の一〇〇年」『悪夢の選択』)。逆に自省的懐疑主義も超越的理想主義や適応的実用主義から批判と相対化に晒される。文化はこの三つの作用の拮抗とダイナミズムからなっている。

そして井上は、一九七〇年代以降の状況を文化の適応機能が肥大し、超越、自省の作用の衰えによる一元化が急速に進行し、三つの作用の拮抗と補完の動的な関係が喪失しているとしている。それは、文化における活力や創造力の喪失につながるものである。

井上のいう文化の三つの作用は、文化の学習である教養についてもいえるだろう。人間形成には、現実と距離をとる超越性や超越性を相対化する自省の契機が不可欠であるが、適応文化である「キョウヨウ」にはそうした契機がみえにくいのである。教養主義の終焉は特権的教養を放逐したが、同時にさきに触れた大衆平均人(サラリーマン型人間像)文化と適応の文化(実用主義)の蔓延をもたらしたのではなかろうか。(以下略)

竹内洋『教養主義の没落』(中公新書、2003年)より抜粋。

なお、本文中の一部の漢数字を算用数字に変更し、小見出しは省略した。

B 日程入試問題（未修・論文）出題趣旨と解答例

出典は、竹内洋「教養主義の没落」（中公新書、2003年）で、大学などの高等教育における教養主義の没落、大衆化を批判的に論じた著作です。ネット全盛の今日、教養主義は「没落」を超えてもはや「死滅」していると言ってもよいかもしれません。

法律家養成制度も含め、高等教育全般に通じる重大な問題について、少しでも問題意識をもってもらいたいと考えて選択しました。

出題意図

2番は、「～とは」という言葉の定義を意識してその本質を対比させるものであり、理解力と論理性と要約力を試す問題である。

3番は、筆者の立場という縛りのもとで、ある問題を筆者であればどう評価するかを推論する力を試すものである。さらに自分の意見を展開させることにより、議論する力や文章の構成力を見る問題である。

1番

筆者の結論の論拠をコンパクトに論じさせる問題で、理由づけに関する論理力を試す問題です。制度的要因と文化的要因の双方が不可欠な要素となり、どちらか一方では不完全です。

制度的要因は、大衆化（階層が融解したこと）であり、文化的要因は平均化指向でしょう。かつての階層化と（知的）エリート指向とは逆方向に向かっているわけです。後者については、サラリーマン文化を選択してもよいでしょう。比較的好くできていたと思います。

（解答例）

「日本における高度成長のあと、経済的・政治的・文化的次元での地位の一貫性を持つ階級が融解して、階層的に構造化されない膨大な大衆が生まれた。この新中間大衆社会文化の特徴は、大衆平均人の文化を正当な文化と位置付ける点にある。その結果、サラリーマン文化が蔓延し、覇権を握り、教養主義を決定的に没落させたのである。」

2番

「～とは」という言葉の定義を意識してその本質を対比させるものであり、理解力と論理性と要約力を試しています。

「対比して説明せよ」という問いですから、素直に、「教養主義は」「キョウヨウ主義は」

といった主語で説明してほしいと思います。そのうえで、両者の違いを浮きぼらせるように、対照的に書くと論理が引き立ちます。内容的には概ねできてはいたものの、もっと引き締まった文章を心がけてほしいと思います。

(解答例)

「教養主義は、思想、文学などの人文系の読書を通じて人格形成をすることに価値を置く生き方であり、教養を身に着けることで大衆文化と自らを差異化しようとする。他方で、キョウヨウ主義は、一般常識や一般経験に通じて人格形成を行いつつ、他者との軋轢を避け、円滑な人間関係を形成するために、世間並の知識を得ようとする生き方であり、キョウヨウは他人より突出することを避け、大衆文化に同化する手段の1つとなる。」

3番

まず問われているのは、「筆者の考えからの批評」という推論です。筆者はこのような議論に否定的であろうことは予想できるでしょう。

問題はそこから先の自分の考えの展開ですが、筆者に賛成する一本調子の文章が目立ちました。職業教育の必要性論にも配慮しつつ（視点の多角性）、具体例もあげるなどして、より説得力ある理由づけを書いてもらいたいと思います。

解答例

「筆者の立場に立てば、このような大学の職業訓練校化の議論は、大学生の大衆化を一層促進するものであり、大学の教養教育を制度として死滅させる提言であって到底賛同しえないであろう。筆者によれば、教養主義を否定する職業訓練教育によって、大学生の状況への「適用力」は伸ばせるが、人格的主体性の確立のために必要な知的な「超越力」や「自省力」は培われないと批判するだろう。

私もまた、筆者の見解を支持する。確かに、今日、地方経済の労働力不足に対応するための労働生産性の向上は重要な政策課題であろう。

しかしながら、人間は機能の更新がプログラム化された機械ではない。自らの適性にもとづき職業や仕事を選択し、成長する喜びを通じて、主体性が形成され、ひいては業務の改善と生産性の向上が実現されるのである。そのような自己発見や自己実現のためには、仕事や自らの在り方を客観視する超越力や自省力が不可欠であろう。人格と切り離された「作業」への適用力をいくら育てても生産性は伸び悩むだろう。大学教育から批判力の養成のための教養教育が失われることは、結局のところ、職業教育による生産性の向上というこの議論の目的を長期的に阻害するのではなかろうか。

たとえば、外国語でのコミュニケーション能力にしても、語学能力だけでは不十分であり、言葉の背後にある歴史や社会に対する理解が不可欠である。その意味での教養は、自己の相対化と相手の文化の尊重に基づく相互理解を深める。それがサービスの付加価値を

高めることにつながるはずである。

大学において職業教育を重視することを全否定する趣旨ではなく、要はバランスの問題である。ただでさえ、「教養主義」の没落が進んでいる中で、歴史や文化に関する教養教育を軽視し、目先の実学に傾斜することは、総体として若者の知力を減衰させ、長期的に日本社会の没落を促進するのではないか。」